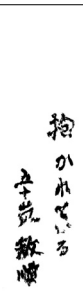

如是我聞（にょぜがもん）

第23回聞き書き

「助かる縁のなき身」

五十嵐 務 師

別府市・元四日市別院法務員

（2009. 7. 18）

皆さん、お久し振りです。やっと、ここに立つご縁を頂きました。

命終近い聖人が関東の同行にあてたお手紙に、「この身は今は歳きわまりてそうらえば、定めて先だちて往生しそうらわんずれば、浄土にて必ず必ず待ちまいらせそうろうべし」とあるのを見て、安心というか有難い気持ちで一杯になりました。聖人の御遠忌ということで私たちは「お待ち受け」ということを言いますが、待っていて下さるのはどちらでしょうか。聖人は七五〇年も待っていらっしゃる。勿体ないことです。

命ある者は必ず滅し、会う者は常に離れる。これが人の悲しみであり苦悩です。浄土はその別れのないところ。釈尊はそうした「倶会一処（ぐえいっしょ）」の極楽浄土への往生を勧めておられる。私はこのことを教えられて、死ということが一変しました。そして、瞼（まぶた）の裏にたくさんの懐かしい顔が走馬燈（そうまとう）のように現れました。岡本照子さんのお婆ちゃんの葬儀の時、ここの坊守さんが弔辞で「お目出度い」と言われましたが、死んでお浄土へ往生することほどお目出度いことはないですね。

私は夜中に眠れない時、こんな楽しい想像をするんです。お浄土には車輪ほどの大きな蓮が赤、青、黄、白と輝いていて、そこに正遠（しょうおん）先生が親鸞聖人をお連れしてくる。八功徳水（はっくどくすい）で醸造された浄土の銘酒でパーティが始まれば、忠弘さん、福円寺さん、ここにいる皆さんやってきて、お酒が進むほどに仏教の話が弾む。倶会一処の喜びは際限もなく拡がって、楽しいですね。

私は藤原正遠先生にお育て頂きました。正遠先生は、親鸞聖人が師のお姿をとって私のために現れて下さったお方だと、信じています。先生のお話は、すべてが阿弥陀さまのご活動。怒ることも泣くことも笑うことも、阿弥陀さまのお与えでないものはない、と。ところが人間は親にすべてをお任せすることができない。地獄に行くほかない。だから阿弥陀さまはお念仏を用意して下さった。「いずここにも行くべき道の絶え」たところで、思わずお念仏が私の強情な口を割って出て下さる。

それから正遠先生は、煩悩は私の所有物ではなく、仏の所有物であると言われ、ビックリしました。私にとって煩悩は、むしり取ることが出来るのなら、むしり取って踏みにじってやりたい邪魔な存在。しかし考えてみれば、煩悩があればこそ負けてはならぬと家族を養ってきた。また仏道を歩むご縁を頂けた。煩悩が仏業（ほとけわざ）と知らされると、煩悩に対する気持ちは変わってしまい、それから煩悩に「様」をつけて拝むようになりました。

遇（あ）いがたき教えに遇い、他力の念仏も回向されて、人生最後の一日一日を家内と静かに暮らせるはずでした。しかし、そんな自分中心の欲望は家内の認知症によってこわされてしまいました。まことに「一切皆苦（いっさいかいく）」です。出雲路先生の本に「苦は真理なり」とありました。

これまで、本願を信じ念仏申せば、老後には楽が頂けると思っていた。如来さまによって敷かれた苦が、私の信心で取れるはずがない。「抜苦与楽（ばっくよらく）」というときの苦は、如来さまがお与えの苦ではなく、如来のはたらきを覆（くつがえ）して楽をしようとして苦しんでいる、私の作った苦であったと、教えられました。

出雲路先生も若い頃、西村見暁先生に「そこを動くな！」と叱咤（しった）されたそうです。「そこを動くな！」とは「一切皆苦のところから逃げるな」ということですね。如来さまの下さった苦の道にどっかり腰を据えて、苦を内観しようという気持ちに変わりました。考えてみると、親鸞聖人も清澤先生も正遠先生も、老後は苦しまれて、お念仏一つで浄土にお還りになった方ですね。私も真似させていただいて、一切皆苦の中に身を置いて、み親の名を呼ばせていただき、命終の時までお与えの苦を味わわせて頂こうという気持ちに、やっと今、落ち着いたところなんです。

聞き書き担当者・感想

五十嵐先生のお話しされるお顔は「光顔魏魏（こうがんぎぎ）」と輝いていました。私も、「一切皆苦」の真理に順い、苦を払いのけるのでなく、苦をそのまま頂いていける道を学んでいきたいと思います。（香田紀子）

第25回（八月一日）村上秀麿師「聞くということ」